アーチェリーの文化小史：二つの英語事典記事の翻訳を通して

Cultural short history of Archery:thorough renditions of English article from 2 dictionaries

1K10C420-1 宮﨑沙織

主査　志々田文明先生　副査　寒川垣夫先生

【研究目的】

オリンピック種目でもある、アーチェリー。日本人の活躍が近年目立ち始めたことにより、アーチェリーの存在感は急速に高まってきている。筆者は、早稲田大学に入学したのち、アーチェリー部に入部し、活動してきた。それによって競技関連の知識は一通り理解したが、スポーツ競技としてのアーチェリーを超えて、アーチェリーが、何処で、誰によって、どのようにして、なぜ始まったのか、については十分な理解がなかった。そこで、エルマー（1969）の書『洋弓』を縦糸にし、そこに記述されていない内容を下記の英文スポーツ百科事典の記事をはじめ日本の『スポーツ大事典』など他の文献と比較検討して、⑴ 簡便なアーチェリーの文化小史を構成し、⑵ それについて考察することを主要課題として設定した。

本研究のオリジナリティは、翻訳されていない以下の二つの専門事典のアーチェリー記事を翻訳した点にある。

・Encyclopedia of world sport,volume1: From Ancient Times to the Present,
ABC-CLID,Inc.,1996.

・The Oxford companion to sports & games, edited by John Arlott, Oxford University Press, London, New York,　Toronto 1975.

【結論：アーチェリーの文化小史】

Ⅱでこの内容を論述した。主な内容は以下の通りである。

第一節では、古代についてのアーチェリーについて記述した。Renson(1996)によると、アーチェリーの特徴は土地それぞれで独自のアーチェリー文化が花開いたことである。ここでは、弓の起源や、宗教的な一面を持った壁画や、古アッシリアの古墳から発掘された彫刻など各地のアーチェリー文化について紹介した。弓の歴史をたどったのち、弓で殺害されたアイスマンの事例や、アフリカ、南アメリカ、北米など各地でおこった弓の文化や、弦楽器としての弓の文化を追った。

第二節では、イギリスにおけるアーチェリーについて記述する。近代アーチェリーの原型はイギリスにある。英国長弓の起源を追った後、ヘースティング、スタンダード、スコットランド、クレシー、ポアティール、およびアジンクール戦争におけるアーチェリーの発展の歴史を記述した。その後アーチェリーが保護されていた時代の法令に至るまで、アーチェリーの歴史を追った。

第三節では、アメリカにおけるアーチェリーについて記述した。インディアンの射法からアメリカ独立戦争、そして南北戦争の時、弓術を普及させる結果を招来した南方軍のモーリス・トンプソンとウィル・トンプソン２人について述べた。その後迎える、弓術は盛衰の時代。その理由は何だったのか。その理由を記述した。1904年、世界博覧会での競射大会によりアメリカの弓術は息を吹き返す歴史を持つ。これらの歴史について、時系列順に記述した。

第四節では、古代の美術品でもある日本の弓が、世界にあるほかのどの弓ともちがって、別なものであることを述べた。モース教授の研究により、日本を含むアジアの主な弓師たちは、牽引を親指で行う「親指引き」で射っていることが分かった。また、昭和の時代においてアーチェリーと、「弓道」が競射会にて交わった歴史について記述した。昭和の時代において、競射会によりアーチェリーは日米交歓の一助となった。また、アーチェリーと弓道の関係についても述べた。昭和の時代、アーチェリーを嗜み普及させた人々は弓道家であったため、現在のアーチェリーの発展は、弓道を抜きにしては考えられないことが分かった。

結論では、二つの課題に対し結論を述べた。⑴ の課題に対しては、文化小史を要約した。⑵ の課題に対しては、作成した文化小史について考察した。アーチェリーは、今でも弓の改良が進むスポーツである。この文化小史を作成し、弓は変化しても基本の射法は比較的変化していないことを学んだ。科学による変化がありながらも、人々の弓の楽しみ方は昔からかわらないところに、アーチェリーの文化としての興味深さがある。